
イケメン男子、レンタルできます。

水無月うた子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イケメン男子、レンタルできます。

【Nコード】

N5876Q

【作者名】

水無月うた子

【あらすじ】

恋愛ゲームの時代は幕を閉じ、台頭するは恋愛シミュレーションロボット！？

恋愛経験値0のこみは、恋愛シミュレーションロボットのレンタルサイトで、間違っって自分の好みとは真逆の、ホスト風ロボット・E-110号をレンタルしてしまう。110号の性格は最悪だが、彼とデートに向けて練習をすることになり…。

1..ゲームの時代は終わった

私の両親が学生だった時代、「恋愛シミュレーションゲーム」なるものが巷で話題になっていたという。

ゲームの中のキャラクターとプレイヤーが交際し、仮想恋愛体験ができるゲームなんだ、と私の父は語っていた。

初めてそのゲームについて聞いた時、私は「モテない人間のするゲームなんじゃないの、どうせ」と鼻で笑っていた。そして、私はきっとそんなゲームを今後一切することなんて、ないのだろうな、とも思っていた。小学生くらいのころだ。

その通り、私は恋愛ゲームなどにはご縁のない人生を今のところ送っている。

というのも、今の時代、恋愛ゲームなどというものが存在しなくなったからだ。世間ではあれはひと世代前のものだとして認識されているし、私もそう思っている。いまどきの小学生は存在すら知らないかもしれない。

なぜか？

それは、恋愛ゲームに台頭する新たなツールが、現代では一般化してしまっているからだ。

その名も、恋愛シミュレーションロボット。

主としてインターネット上で手に入れることができる、人間そっくりのロボットだ。

一般的な解釈としては、実物の人間からモテない人間が手に入れるものとされている。

そして、もうひとつ加えておくならば、私は今まさに、恋愛シミュレーションロボットを手に入れるべくネット通販サイトを閲覧し

ている最中である。

2..クリックは慎重に

「うーん……」

まず、自己紹介から始めようか。

新成ここみ、27歳、女、受付嬢、ネサフ、イコール年齢。

とりあえず単語だけ並べたが、項目名は察してほしい。後半は、特に。だってそんな事情がなけりゃ、こんなサイトを見たりはしないはずだ。

「うーん……」

ブラウザと睨めっこ（こんな表現をこの歳になって使っているのか）しながら、私は再び唸る。

唸ったところで、誰も聞いちゃいない。ここは私だけの城なのだから――要するに、実家を離れて自分で借りたマンションで過ごしているというだけのことなのだが。

お目当てのイケメンロボットが見つからない。

そうぶつくさと呟きながら、通販サイトの画面を下へ下へとスクロールする。

今私が見ているのは大手恋愛コミュニケーションロボット会社の公式サイトの中にある、通販ページだ。女性対象のイケメンロボットだけで、合計3000通りものロボットが販売・レンタル可能だという。

購入するには私の何か月分もの給料が吹っ飛ぶようなお金が必要だが、2週間くらいのレンタルならまだ手の届く範囲で収まる。

ロボット一覧を見ていては埒が開かない。

私は検索フォームに「細身 色白 メガネ 温和 聡明」と単語

を並べて検索ボタンをクリックする。

私の母親の時代には、こういう男性のタイプを「草食系男子」と表現したらしいが、今では完全に死語である。

即座に表示されたのは、「検索結果 0件」の6文字だった。

私はため息をついた。やっぱり欲張りすぎたのだ。

仕方なしに、「細身 色白」の2つのキーワードで検索ボタンをクリックする。

すると今度は打って変わって何百件もの検索結果が表示された。

「3000件よりはマシだね」

私は再び画面をスクロールする作業に入る。

私が「細身 色白 メガネ 温和 聡明」なロボットを探しているのには、少しばかりわけがある。

先日受付嬢たる私に向かつて、私が仕事当中であるにかかわらずデートに御誘いしてきた男性が、まさに「細身 色白 メガネ 温和 聡明」と検索すれば出てきそうなタイプの男性だったからだ。

もちろん、デートに誘われたことなど、これまでの人生では一度もなかった。

つまり、デートに関して言えば私はビギナー中のビギナー。

シミュレーションを重ねる必要がある。

デートまでに残された日は約2週間。

それまでに、たとえどんな手段を使っても私の恋愛偏差値を引き上げなければならぬのである。

細身で色白と言っても、さまざまな種類のロボットがある。

私の大嫌いな人種の、母親の時代の言葉で言う”肉食系”の外見をしたロボットがずらりと並び、その間を縫うようにして私好みのロボットの写真が見える。

それぞれのロボットの写真の下にある「音声」ボタンを押せば、

そのロボットの発する声が聞けるという仕組みになっていた。

いくつか外見が気になったロボットの音声を再生してみるが、いまひとつ声が気に入らない。

そうしてさらにページを下へとスクロールしていると、

「来た!!」

ついに、現れた。ナンバーE-109号。私の追い求めていた、細身で色白で温和そうなイケメンが。メガネはしていないが。

続けて音声を再生する。

思わずうっとりと聞きいってしまうような美声が、スピーカーから流れだしたではないか。

「これに決まりだわ」

私は「注文」リンクをクリックし、2週間のレンタルを申し込んだ。

「これで、すべての計画が完璧ね」

そう独り言を言いながら、メールボックスを開く。サイト側から送られてきた注文受付完了メールが届いていた。ダブルクリックしてそれを開くと、信じられない文字列に遭遇した。思わず目を見開く。

「恋愛シミュレーションロボット [E-110号] のごレンタル承りました」

目を疑うような内容。

私が頼んだはずのロボットはE-109号。

ということは、

「もしかして……ひとつ番号間違えてクリックした？」

私が呟いたその声は、裏返っていた。

3..商品を交換したいのですが

慌ててサイトに戻り、「E-110」と検索しようとしたその時であつた。

単調な電子音が私の部屋の中で響いた。マンションのエントランスのチャイム音だ。部屋にあるモニターを確認すると、

「誰よ、これ……」

全く見知らぬ青年が、モニターに映っていた。

私の苦手な人種を絵にしたかのような、ホストを思わせる青年だった。髪は金色、挑発的な釣り上り方をした目、唇は薄い。

そんな男が、ぶすつとした表情を浮かべてモニターの前に突っ立っているではないか。

「あの、どちら？」

息を吸い、スピーカーに向かって私はおそろおそろ尋ねる。

すると青年は呆れたような目をしてこう言った。

「『どちら？』じゃねえよ。見たらわかるだろ。あんたが今さっき注文した、E-110号だよ」

うそ、と私は口に手を当てる。

1時間以内に配達、とはサイトに書かれていたが、こんなに早いだなんて。

とにかく、手違いなのだと説明しなければ。

「とにかくあがつて」

私は解錠ボタンを押した。

しばらくして部屋に上がり込んだのは、紛れもない、サイトに写真が上がっていたE-110号だった。ブラウザ画面と、部屋のソファでまるで自分の部屋であるかのようにくつろぐE-110号を交互に見比べる。確かに、間違いはなさそうだ。

最近のロボットの技術には感心するしかない。こうして間近でみても、E-110号がロボットだなんて言われなければ解らないだろう。どこからどう見ても、人間なのだ。

服装は、ホストを思わせる黒いスーツで、長い脚を組み、私が何か言うのを仏頂面で待っている。

さて、どうしたものか。

こうして私の望んだロボットではなくE-110号がここへやってきてしまっているのが、私のクリックミスなのか、会社側のミスなのか、判断することができなかった。ただ、受領メールには「E-110号」と書かれていた以上、私のクリックミスか何かなのだろう。

「あの、聞いてください」

私はパソコンの画面から、E-110号の方へと向き直った。

どういうわけか、手に汗を握っている。

いや、怖いわけじゃない。怖いわけがない。だって、相手はロボットじゃないの。この汗はそう、ちょっと部屋が蒸し暑いからわき出てきているだけだ。

E-110号は表情ひとつ変えず、私の方を見た、いや、睨んでいるように見える。

「わ、私の手違いで、本当はE-109号をレンタルしたかったんですけど、あなたを注文してしまったみたいで。しよ……商品を交換したいんだけど、それってできる？」

ところどころ噛みながらだが、私は言いたかったことを口にした。その間、心臓はばくばくと鳴り続けていた。別に、このロボットが怖いからじゃない。

彼は私の言葉を聞いて、ふんと鼻を鳴らした。そして少しだけ、人を憐れむような視線を私に向けてきた。そうして、ワテンポ置いてから彼の口から発せられた言葉は、

「どんくせえ」

という一言だった。

ずっしりと心にのしかかる一言。しかしながら、否定など出来やしない。本当にどんくさいのが私だからだ。

「商品って、交換できます？」

もう一度、私は訊く。その答えが「イエス」であることを期待して。

だが、現実はそう甘くはない。悲しいことに。

「無理に決まってるだろうが」

ホストを思わせる恋愛ロボット・E-110号は、あっさりとそう吐き捨てた。

「どうしても、無理ですか」

「どうしても」

「キャンセル料を払ってもですか？」

「当たり前だ」

「本当に、駄目ですか」

「しつこい」

なるほど、私は2週間ばかりこのホスト風ロボットと過ごさねばならないようである。

……なんて、物分かりはいいはずないのだが。

4..シミュレーション、始めます。

「つまり、お前は」

E-110号は私のことを「お前」と呼んだ。ロボットのくせに高飛車な、と私は内心で罵りの声を上げる。もちろん声に出すことなんて不可能だ。

「お前はレンタルした以上、俺と2週間過ごさないとイケねえんだよ」

それは受け容れ難いものだった。

2週間もこのホストまがいの恋愛シミュレーションロボットとともにこの狭いマンションで生活するなど、息がつまりそうである。というか、喰われてしまいそうである。E-110号は私を喰いたくないと思うが。

思わず私は嫌だあ、と呟いていた。

「こっちだって嫌に決まってるんだろ。お前みたいなブスと2週間も閉じ込められるなんて、悪夢だ」

”ブス”という単語を妙に強調して彼は不機嫌丸出しの声で言った。本当に人間みたいだ。ガラの悪い、人間に。

すっかり委縮してしまった私は、小さな声で抵抗することしかできな

い。「そこまで言う?」

うつむき加減で私はため息をつく。少し震えたため息だ。

とにかくはつきりしたことがある。

ひとつは、私が2週間辛抱強くE-110号と過ごさねばならぬということだ。

それから、もうひとつ。

デートに誘ってきたあの男性と似ても似つかぬようなロボットじゃ、

「デートのシミュレーションになりそうにない……」

落胆しきった声色で肩を落としていると、E-110号が少しトーンを上げた声で、

「シミュレーション？」

と語尾を上げた。

「そうよ。私の人生初めてのデートのシミュレーションのためにレンタルしたのに、これじゃ駄目ね」

「ふん。そういうことか」

彼は鼻で笑った。何がおかしかったのだろうか、と考えるが、すぐに、この年齢になって人生初デートなんて宣^{のたま}っている私が滑稽なのだ、と察した。

ロボットにまで馬鹿にされるなんて、散々だな、と私が目に涙を浮かべた時だった。

「そういうことなら、俺様が2週間みっちりしごいてやる」

「……え？」

自信を漲^{みなぎ}らせたE-110号のセリフに、一瞬啞然^{あぜん}とした。

顔を上げると、そこにはうっすらと笑みを浮かべた彼が、私の顔色をうかがっていた。

「どうだ？ それでいいんだろう？」

「……ええ？」

いいも何も、E-110号と、私を誘ってきた男性とではまるでタイプが違いすぎるのだ。シミュレーションが成立するとは思えない。

それに第一、私の頭がE-110号を受け付けない。

そのことをももごと説明すると、あきれた、といった表情でE-110号は肩をすくめた。

「タイプも何も、お前はそもそも男とろくにコミュニケーションしたこともないんだろ？ 時間がないなら、どんなタイプだろうが練習するしかねえだろ」

「そりゃ、そうだけど……」

返すべき言葉などない。E-110号の言っていることは間違っ

てはいない、と思う。

私の弱々しい返答を聞くと、E-110号はにやっと白い歯を出した。

「なら、諦めろ。始めるぞ、お前の恋愛シミュレーション」

5..第1ハードル

いくら人間のように見えるとは言っても、やはりE-110号はロボットなようで、私が晩御飯に作ったカレーを勧めると、そんなもの食えるかと一蹴されてしまった。

「食い物じゃなくて、充電でエネルギーを補充するんだよ。規約に書いてあったろうが」

規約を飛ばし読みした私には、そうなのか、とぼんやり納得することしかできなかった。

仕方なしに私はいつも通り一人で夕飯を食べ始め、その間E-110号は部屋のコンセントに足首から伸びたコードをつなげて充電するという、シュールな光景が繰り返された。

「まず、お前の改善すべき点を列挙してやる」

コードにつながれたままの状態で、E-110号はカレーをほおばる私に指を向けた。どこか、うとうととしているようにも見える。目が開ききっていない。充電中はそんなものなのか、と私は勝手に納得した。

はあ、と私は気の抜けた返事をする。相変わらず、居丈高な物言いだ。

「受付嬢をやっているとは思えないほど表情が暗い、しゃべり方がおどおどしすぎ、眼鏡が古臭すぎる、余計な肉が体につきすぎ、それから目も小さいし唇は何となく張れっばったいし、鼻の穴が見えすぎで、食べ方にも品がない、それに、」

「ち……ちよっと！」

いくらなんでも、だ。これほど一気に欠点を列挙されると、いくら自尊心の低い人間とはいえど、傷つかずにはいられないというものだろう。

スプーンを振り回しながら「そんな言い方、ひどくない？」と抗

議すると、「そういうところが女らしさに欠けるんだよなあ」と間延びした口調でE-110号は言った。

「俺の言ったことに反論しても無駄だろ？ 改善しろよ。せっかく丁寧に指摘してもらって、それはねえだろ」

ここまで言われてしまっでは、ぐうの音も出ない。

考えてみれば、確かにな、と思う点だらけなのだ。

過去に何度か、「受付嬢がその表情じゃねえ」と言われたことがあったし、話している内容が聴きとり辛いと難癖をつけられたこともあった。

私が一人で頷いていると、

「心当たりあるんじゃないの」

と、すかさずE-110号は突っ込んできた。

それから、と彼は続けた。

「いちいち俺のことはE-110号なんて長ったらしい名前で呼ぶ必要ねえから。その、お前の初デートの相手ってのは、なんて名前なんだ？」

そのまぢやんとむ
「園町聡武っていう人だけど」

いきなり何を聴きだすのだ、と疑問に思いながらも私は答えた。彼が渡してきた名刺にそう書かれていたのだ。ケータイのアドレスとともに。

園町、という苗字がお似合いの人だったなあ、と思いだしている
と、

「じゃあこれからは、俺のことは聡武さんって呼べ。それがお前にとっての第1ハードルだ」

「……はあ？」

E-110号の指令じみた発言に、私は首を突き出し、眉をひそめた。

「そういう物言いもやめるようにしろよ。じゃあな」

それだけ言い残して、E-110号——いや、聡武さんと言った方がいいのか——は、自ら足についた電源スイッチを切った。

何なんだ、こいつは！

6..真夜中の訪問者？

？ブス女？。

昔からそう言われ続けてきた。幼稚園に入る前、マンシヨンの砂場で遊んでいた時、幼稚園の入園式で一列に並んでいた時、初めて好きな人にチョコを渡した時、学生時代。

ずっとずっと、男女問わず言われ続けてきた。

もうあんな暴言なんて吐かれたくない。そう思っていた。そう思っていたのに――

「こんのクソロボットオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

さらっと人の傷つく言葉を言いやがってナルシスト男！……！！直接的に言われたわけではないが、間接的に「ブス」と言われているのと同じだ、あれでは。

何よ何よ偉そうに指摘しちゃって！

ええい、もうこうなったらコンセント抜いてやる人間をなめるな
よ機械男!!!!!!

心の中で叫びわめき散らしながら、私は大股で、E-110号の足から延びるコンセントの先へと向かった、そんな午後11時。

ピンポーン。

部屋のチャイムが鳴り響いた。テレビから出てくる音でも、パソコンから出てくる音でもない。まぎれもなく、マンションの呼び鈴だ。

こんな非常識な時間にやってくるなんて、誰だろう？　もしかして、不審者？　ストーカー？　いや、それはないだろう。だって私

はブスだもの、と半ば自虐ネタに走りながら、私は玄関モニターを覗いた。

ところが。

モニターの前にいたはずの人物は、モニターに自分の姿が映るなり、ダッシュで逃げていってしまった。ちらりと見えたその姿も、黒っぽいフードをかぶっているのか、まったく顔が見えなかった。あつという間に、モニターの前は無人となる。しん、した静寂がそこにあるだけだった。

「うそ、本当にストーカー？」

私は首をかしげた。

こんなことって本当にあるんだろうか。

「あるわけねえだろ おが」

翌朝、かよい乙女の不安な夜の出来事は、E-110号のぶつ
 きらぼうな一言で一刀両断された。不機嫌そうにむすつと眉根を寄
 せている。

「だって、お前ブスだもん」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

「NGワード言いやがったこのホストロボッオオオオオオオオ」

!!!!!!!!!!!!

とかいつて椅子を振り回しながらも、どこか不安な気持ちであることには間違いなかった。

くそ、こんな時こそ、「俺が君のことを守ってやるから」とか言

ってくれるイケメンが必要なのに！

「言っとくけどな。俺は絶対にお前に向かって『俺が君のことを守ってやるから』なんて言わねえからな」

なんか心読まれちゃってるし！ 非常に悔しい。なんだかとっても悔しい。

「ごちゃごちゃ言ってるねえで、とっとと飯食え。それから仕事行け」
なんだこの上から目線は、とぶつぶつ文句を言いながらも、E-110号の言う通りに食事を終え、出勤した。

家を出る間際の私の背中に、また一言ぶつけてくる。

「仕事中も気を抜くなよ！」

まったく、余計な御世話だ。

7..仕事、向いてますか？

仕事場に着くと、ようやくEー110号から解放された気分になった。家の中でリラックスできないなんて、あんまりだ。

予定ならば、草食系イケメンとまったりデートまでの2週間を過ごすはずだったのに。あんなにチャラくって口うるさい男が来たんじゃないあ、落ち着こうにも落ち着くことができない。

いつも通り、制服に着替え、受付カウンター越しに座る。

私が勤めているのは、オフィスビル1階のロビーの受付カウンターだ。といっても、この会社の正社員ではない。派遣会社から派遣されただけの身分だ。だから、これといってこの会社に愛着があるわけではない。

よく他人から言われるのは（というか、Eー110号にも指摘されたけれど、）どうして私みたいにブスで笑顔のない人間が受付嬢になれたんだ、ということだ。

私自身、こんな自分が受付をやっているのは不自然と思う。

推測するに、記憶力が買われたのだろう。昔から、記憶力だけはいい方だ。一度カウンターまでやってきた人の顔と名前はほぼすべて一致している。

でもやっぱり、もっと愛想よくしたら？という意味の言葉を投げかけられることは多い。それが、私にとってはかなりの負担だった。

これまでなら、仕事場よりも家。早く家に帰りたい。そんな私だったが、今となっては全く逆だ。皮肉なことに。

出来るだけ、家にいたくない。

昼過ぎのことだ。

いつも通り、受付嬢として取次などの仕事をしていると、1人の女性が受付カウンターへとやってきた。

地味な人だな、というのが第一印象だった。来ている服も、化粧も、派手さとは程遠い。

といって、私と同類というわけではない。

地味だが、顔立ちは美しい。

うらやましいなあ、と羨望のまなざしで見る。

「あの、道をお尋ねしたいんですが」

はかなげな声で、女性は私に尋ねた。

どうしてわざわざこのビルに入って、道を訊くのだろう。

すぐ近くには交番もあるのに。

私は内心疑問に思いながらも、無碍にすることもできず、

「はい、どちらですか？」

と口にした。

なるべく笑顔を心がけて。

すると、というわけか、彼女は私の顔をじろじろと観察するようになら、

「県立美術館の2号館って、どう行けばいいんでしょう？」

ああ、2号館って分かりにくい場所にあるだね、と思う。

正直、口先で説明できるかどうか。

私はカウンターからメモ用紙を取り出し、簡易な地図を書いて説明すると、彼女は「ああ、わかりました」とにっこり微笑み、もう何度か私の顔を観察してから、私の前を後にした。

何だというのだろう。

やっぱり、愛想悪いなこの受付、とか思っているのだろうか。それとも、明らかにつくり笑いが不自然だと思っていたのだろうか。

うーん、と私は首をひねる。

この仕事、私には向いてないですか？

8..仕事場訪問

違和感を感じたのは、それからしばらくしてからのことだった。どこか物陰からじっとこちらを観察してくるような、そんな視線が私に突き刺さっている……気がするのだ。

誰が見ているのだろう、とロビーを見回すが、特にこちらを見ている人間は見当たらない。上手く隠れたのだろうか。

ふいに、昨日の夜中に私の部屋のチャイムが鳴らされたことを思い出す。

顔も見えぬまま、モニターの前から走り去って行った人物のことを。

（まさか、本当にストーカー？）

そう考えると、ぞっとする。私の家も職場も全部知られているなんて！

まさかとは思うが、本当にストーカーならこれほど恐ろしいものはない。

朝から晩まで私のことをつけ回し、ベランダに干した洗濯物をひったくり、いずれは私の家にも侵入してくるんだ！

そんなことを半ば本気で妄想しながら、もう一度、と思い、ロビー全体に目をやる。

すると、私の視線を避けるようにしてサッと植木の裏側に隠れる人影があった。

怪しい。

非常に怪しい。

カウンターを離れて、勇猛果敢にもそちらへ行こうとした時だった。

ビルの自動ドアが静かに開き、そこから入ってくる1人——いや、1台が目に入った。

金髪に、真っ黒なスーツ。顔にかかった柔らかな髪を右手で振り払っている様子がこれまたナルシストらしさを醸し出している。
(なんで来ちゃうのよお……)

現れたのは、E-110号だった。

仕事場にいる以上、「出ていけ!」と叫ぶことができないのがつらい。あくまで、受付嬢とお客様の関係だから、乱暴な口を利いているのが他の人に知れたら、どうなることやら。

通常なら鬱陶しく思うところだが、ストーカーがこのビル内に存在すると分かった今では、ほんのちょっぴりだが安堵する気持ちだ。E-110号なら私の代わりに立ち向かってくれるかもしれない。そう考えているうちに、E-110号は大股でぐいぐい私のところまで近づいてくる。

ロビーにいる社員たちの視線が、E-110号に集中していることに気付いた。黒髪の間髪ばかりいる空間で金髪は確かに目立つが、それ以上に、彼の美貌が女性たちの視線を釘づけにしているのだった。

そんな視線に、E-110号は目もくれない——なんてことはなかった。

熱い視線を送る女性に向かってご丁寧に、にこりと笑顔を送っている。微笑みかけられた女性たちは黄色い声をあげた。

それから、彼は案内カウンターまでやってきて、「よう。仕事やってんのか?」
と白い歯をのぞかせた。

そんなのんきな様子が些か腹立たしく、
「見ればわかるでしょ」

と私はため息をつく。

「何しに来たの」

「決まってるだろ。お前の仕事ぶりを見に来たんだよ」

「余計なお世話……」

私はぼそつと呟く。

つまりは、私の仕事中の身振りや言葉遣いまで監視しようというのだろう。これでは監獄にいるようなものだ。

そんなことより、と私はE-110号に、さっきから感じる視線について小声で、手短に話した。

「またまた被害妄想か」

E-110号は露骨に顔をしかめる。

むきになって私は反論した。

「違う、本当だってば。あっちの、植木の辺りに」

「唾飛ばすなよ、汚い」

私はその方向を指差すと、彼は仕方ねえやつだなあ、とこれ見よがしにため息をついて、植木の方へと歩いて行った。

9…ストーカーの正体は

これで何とかなるんじゃないか、と気を抜いたその時だった。

ボタン！ と派手な音がロビーに響いた。

今まで静寂だったこの空間に突如現れた物音は、周りの人々の、そして私の注目を引きつけるには十分だった。

何か倒れたのかな、とカウンターからロビーを覗く。

倒れていたのは、E-110号だった。

それも、単純にこけた、というような倒れ方ではない。ぐったりと床に横たわっている。

なにか不吉なものを感じ取り、私は大の字になって伏すE-110号に駆け寄った。

「ちょっと、どうしたの」

私はその肩をゆすってやっても何ら反応が返ってこない。

「しっかりしてよ」

思わず呼吸を確かめそうになるが、ロボットだから意味がないのだったとすぐに気付く。

ロボットの場合、どうやって意識の有無を確かめればいいのか、見当もつかない。

とにかく、ロビーのソファにでも寝かそうかとE-110号の上半身を起こした時、駆け足で近寄ってくる男性が目の端に映った。

園町さん？ と一瞬疑ったが、すぐに別人だと判る。

細身、色白、温和。

ただしメガネはしていない。

どこかで見たことがあるな、どこだっけ、と首をかしげる。
「ちよっと見せてもらっていいですか？」

さわやかな声。

どこかで、聞いたことがあるような気がする。気のせいか。

そう考えているうちに、彼は私の腕から倒れたE-110号をひたたくった。

ロボットなんですけど私が言うよりも早く、男性は慣れた手つきでE-110号のズボンのすそをめくり、カバーを外す。そこには、電池残量の表示があった。

私も知らないようなことを、どうしてこの人は知っていて、なおかつ手早く確認できるのだろう。

「よかった。単なる充電切れみたいですわね」

男性は微笑む。輝く笑顔、という単語が私の頭の中で浮かんた。さわやかで、嫌みの感じられない表情だ。

その直後、男性が発した言葉に、私は度肝を抜かれた。

「はじめまして。あ、でも僕はさっきからずっとあなたを見ていたんですけどね。僕、恋愛シミュレーションロボットのE-1109号と言います」

……え？

E-1109号？

私は耳を疑った。

もう一度言うよう男性に促すと、もう一度、丁寧に彼は自らをE-1109号だと名乗った。

Eー109号。

それはまさに、私が手違いさえ起こさなければレンタルしていたはずの恋愛シミュレーションロボットではないか。

通りで、どこかで見たことが、そして聞いたことがあると思った。こうして目の前にしていると、やっぱりドキドキする。

……なんて、言っている場合ではない。

「ずっと見てた……？ ストーカーじゃなくって？」

先ほどから感じていた視線は、まさか109号なのだろうか。そう考えると嫌な気にはならないから、不思議なものだ。

「ストーカー被害に遭っているんですか？」

「いえ……。チャイムを鳴らされたとか、その程度ですけど」
すると彼はばつが悪そうに頭を掻いた。

「すみません、それ、僕なんです。ご迷惑おかけしたようなら謝ります」

「はい？」

思わず声が裏返ってしまった。

あまりにも突然なことがいくつも重なるものだから、私の頭はこんがらがるばかりだ。

109号はそれよりも、と話を変える。

「とにかく充電しないといけませんね」

充電ならば、つい昨日だってEー110号自ら行っていたような気がするのだが、その点には触れず、私は109号に託す。

ポケットからマンションのカギを取り出し、手渡した。彼なら信用できるからだ。

「これ、私の部屋の鍵です。入って110号の充電をしてもらってもいいですか？」

「助かります。親切にありがとうございます」

彼はさわやかに微笑んで見せた。

やっぱり、かっこいい。透き通るように白い肌に、笑顔がよく映える。王子様、と呼びたくなってしまう。

彼は110号を軽々と背負った。

「細かいことは、あなたの仕事が終わったらすべて説明します」

一体何が私の知らないところで起こっているのかなんて、知る由もない。

10：明らかに真実（上）

仕事を終え、家に帰ると、E-109号がリビングで行儀よく正座して私の帰りを待っていた。

私の代わりにカーテンを閉め、洗濯物を取り込み、風呂まで沸かしてくれているという律儀さだった。

その様子からは、どこか主人の帰りを待つ犬のような忠実さを感じる。

まだ110号との生活が始まって間もないが、絶対に彼ならそんなサービスはしてくれないだろうことは容易に推測できる。109号と110号は好対照に違いない、と私は判断した。

そのE-110号はというと、目を閉じソファに横たわっていた。まだ充電が終わっていないのだろう。

「お仕事帰りで疲れているとは思いますが、本題に入りたいと思います」

しぐさも言葉も、どれをとっても礼儀正しいなあ、と私は感心した。本当なら私はこっちのロボットをレンタルしていたはずなのに、そう思いながら、もちろん大丈夫、と私は答えた。

あれから仕事中、110号と突如現れた109号について、ずっとあれこれ考えていたのだ。

私の知らないところで何が起きているのか。それは重大なことなのか、聞いても笑い飛ばせるような、取るに足りない小さなものなのか。

考えれば考えるほど、早く真実を知りたいという気持ちが増大していくだけだった。

一体E-109号から何を打ち明けられるのだろうか――その答

えは、次の瞬間提示された。
深刻な口ぶりで、彼は私にこう告白した。

「E-110号は、今回の仕事をもって廃棄になるんです」

——ハイキ？

私はきょとんとE-109号を見返した。
ご丁寧に彼は「もう110号が使い物にならないってことです」
と悲しそうに補足した。

——それって……捨てちゃうってこと？

私は耳を疑った。

思わず、「うそでしょ」という言葉が口をついて出た。それに対し、109号は静かに首を振るだけだ。

——私と2週間過ごしたその後に、E-110号はこの世からいなくなってしまうということ？

それはあんまりじゃないか。

いくらロボットとはいえど、これほど人間に似ているのだ。

モノはモノでも、限りなく生物に近いモノを廃棄する——想像にかけて、私はやめた。あまりにも惨すぎる光景だ。

「廃棄」という言葉は、私の胸に重くのしかかる。
「どうして廃棄になっちゃうの？」

私は半ば責めるような口調で109号に尋ねる。

「需要がこの数年間で激減したんです」

「それって、E-110号があまりレンタルされなくなったってこと？」

「そういうことです。うちの会社では、基本的に需要のないロボットは片っ端から『切って』いくことになっているんです」

「その対象にE-110号も入ってしまった。そういうことなのね」「はい。でもそれ以上に、110号本体が以前大きく破損して以来ずっと不調だったということも原因です。今日のように」

私はそう言われ、再び110号に目をやる。充電しても充電しても、彼は動きだしそうにない。ずっと目を閉じたままだ。

「不調」とはこのことを指すのだろう。機械のことは私も詳しくはないけれど。

「E-110号はああ見えても、最近需要が減っていることに対して不安と孤独感を抱えていました。廃棄が決まると、それはもっと大きなものになりました。だから僕は、廃棄を迎える前に、誰でもいいから人間のユーザーと110号が何日か過ごせたらなって願っていたんです」

不安に孤独感。

あの傲慢にしか見えない110号だって、そんな気持ちを抱えて当然だ。

想像するだけで胸が痛くなる。

不必要の烙印を押され、塵になっていく110号の気持ちは、私なんかが想像するだけでも、十分辛い。

「そんな時、あなたがE-110号を注文した。あなたはまさに恩人と言ってもいいでしょう。E-110号を孤独から救った」

「クリックし間違えたんだけどね」

私は肩をすくめる。

まったく望んでいなかったクリックミスではあったが、それによって110号を救えたというなら、悪くはないのではないか、とい

う気がする。

「そうなんですか」

「そうなんです。本当はあなた、109号をレンタルしたかったの」
109号は目を丸くして、

「こんな偶然があるんですねえ」

私に気を使いつつも、内心ではこれでよかった、と言いたげな口調で息をつく。

「こっちは散々な目にあったけどね」

私は苦笑した。

11：明らかになる真実（下）

それからぷつりと私たちの間から会話が途絶えてしまった。
重苦しい沈黙がのしかかる。

身の回りから音がなくなるということ。それは自動的に、私が110号について幾多の心配を頭の中で巡らせることを意味していた。
「ちょっと、テレビつけてもいい？」

思考をいったん落ち着かせるために、私はテレビのリモコンへと手を伸ばし、電源を入れる。

夜のニュース番組が画面に映る。アナウンサーが深刻な表情で、女子高生が市内のマンションのベランダから落下した事件について述べているところだった。まだ意識が回復していないらしい。うちの市内で起きた事件だけに、思わずアナウンサーの言葉に意識が集中するのが分かった。

ニュースはやめておこう、とあわててチャンネルを変える。こんなときに余計に暗い気分になるのは真っ平ごめんだ。

歌番組に切り替わったところで、私は109号に疑問をぶつけた。

「今日あなたがあの場にいたのは、偶然？」

「いいえ。僕は110号を監視するために、派遣されていたんです」

「監視する？ 110号を？」

「監視？ と言ってしまうと、まるで110号が悪人（「人」ではなくて「ロボット」だけでも）で常に見張っておかなければならない対象のような、そんな風に聞こえてしまう。」

「はい。もしものことがあった場合のために。まさに今日のことです
すね」

なるほど、と私は納得する。

「だから、ストーリーまがいのことを？」

冗談めかして私は尋ねる。

「そういうことになっちゃいますね」

109号は苦笑した。つられて私も笑う。

「本当はこんなこと、ユーザーであるあなたに話すつもりはなかったんです。けれど、あなたを——蔭からではあるんですけど——見ているうちに、この人なら分かってくれるだろうって」

「どうして？」

意外な言葉に、私は首をかしげる。今まで「あなたならわかってくれる」というたぐいのセリフを言われたためしがなかったからだ。そんな私が、分かってくれそう、と言われるだなんて。

「110号におどおど接している様子が、何となく信用できる人のような気がしたんです」

生真面目な表情で、109号は言っただけ。

はたから見てもおどおど接して見えるのか、と私は感心すると同時に、みじめな気持になる。

「どうせ男慣れしてませんよ、私は」

口をへの字に曲げて私が呟くと、109号は乾いた笑い声をあげた。

「110号になれなく接する女性は、9割方悪女なんですよ」
君は悪くない、と言いたげな表情で、私の肩をたたく。

「悪女」という単語に私は眉をひそめた。

「それ、本気？」

でも、あながち嘘ではなさそうだな。

そう思う自分がいることも、確かだった。

「そろそろ僕は帰りますね」

しばらくして、109号は110号の足から延びたコードを回収し、立ちあがった。

まだ110号は目を覚まさないのか、という私の問いに、109号は電源スイッチを今は切っているのだという説明をした。あとは

私自身が起動させるだけのようだ。

私が110号のスイッチを押そうとしたところ、109号に制止された。

「今日僕が来たことは、110号には内緒なんです。きっと怒られちゃうので」

「なるほどね」

ありえそうな話だ。

「これからも、110号の監視を？」

私は少し気になって尋ねる。

「いえ。これからはこみさんをお願いしますよ」

「私だけで大丈夫なの？」

一人では心もとないではないか。

「はい。バッテリーの交換はできたので、しばらくは大丈夫のはずです」

もう何も心配することはない、というニュアンスを含ませて、109号は微笑んだ。

「そうなの……」

ある意味、このまま109号と別れてしまうのも名残惜しい。とか言ってみたり。

いや、本人に言う度胸はないけれど。

それから丁重な挨拶の言葉を口にして、109号は私の家を後にした。

その姿が見えなくなってから、大きく息をつく。

心の中に暗雲とでもいうべきものが広がっているのが分かった。

これから110号とどう接していけばいいのだろう。

私は頭を抱えた。

一番手っ取り早いのは――

「このまま電源つけなきゃいいんじゃないの？」
そんな冗談を口にしながら、私は玄関を施錠した。

12…イケメン男子、復活しました。

109号が去ってから、私はリビングに戻り、ひとつ、深呼吸をした。

夜の9時。まだ夕食も口にしていない。なのに、ちっともお腹はすいていない。

――あとは、スイッチを押せばいいだけ。

それだけのことなのに、どういうわけか、踏み出せない。

…別に、口うるさいロボットを起動させたくない、というわけじゃない。決して。

そうではなくて、もしも、スイッチを入れても110号が動きださなかったら、目を開けなかったら、どうしよう、という不安が大きいのだ。

そつと110号の足首に触れる。

何度も思うことだが、これが人間でないということが信じられないくらいに、110号の肌は柔らかい。

スイッチの位置を確認し、それを力強く押した。

「眉間にしわ寄せたらブス度が増すつってんだろーが」

悠々と足を組んでソファに寄りかかっている110号がこんな誹謗中傷としか言えないセリフを吐いたのは、それから10分もしないうちのことであった。

どんな神経をしていたらそんな言葉を投げかけられるのか、不思議だ。本当に。

仕事中も帰ってからもずっとずっと、110号のことで頭がいっぱいだったのに。（ちっとも109号のことを考えていなかったと

いえば、そりゃ勿論嘘だが。」

カッと頭が熱くなって、思わず怒りの言葉が私の口から飛び出す。「あんた、人がどんだけ心配したか、分かってないでしょ！」

そんなとなり声さえ裏返ってしまうのだから、自分で自分が情けない。こんなときくらい、ビシッと決めることができればいいのに。

「心配？」

110号が眉をひそめる。

「そうよ、だって――」

言いかけて、私は口をつぐんだ。

思わず109号が来ていたことを言いそうになったではないか。

そんな私を見て、110号はすかさず不審のまなざしを向けてきた。

「だって、何だよ？」

「だって……」

なんと言うべきか、必死に頭を回らせた結果、

「明日、土曜日だから、どこかヘデートの練習にでも行きたいと思っ
っていたからよ」

半ば意地になって私は何とか答えることができた。

110号はと言うと、そんな私の下手くそな返事を聞いて、「胡散臭え」と呟きこそしたものの、それ以上追及することはなかった。

「で、どこに行きてえんだよ。デートの計画くらい、自分で練れよ」
ぶすつとした表情で110号は尋ねる。

行き先はちゃんと決めていた。でもそこでどういう風に行動するか
の計画はまだ決めていない。

それからついでに言えば、行き先を言うと110号からまた罵倒のセリフを浴びる危険性があった。十分に、予測できる。遊園地や動物園や映画館とは比べ物にならないほど、華やかさのない行き先だから。

それでもかねてから行きたいという思いが強かったので、私は意を決して110号に行ってみることにした。いったん呼吸を置いて、

私は口を開く。

「作家のサイン会なんだけど」

蚊の泣くような声で私が伝えると、そこで110号の動きが一瞬止まった。

私の言った言葉がちゃんと聞こえているのか、と一瞬疑ってしまふほど、110号の反応はなかった。

もしやまた故障なのかと疑い始めたその時、110号は険しい――本当に険しい目つきをして、

「サイン会い？」

その声は、今までも聞いたことがないほどに、低い声だった。

13…デートは練習であっても気を抜くな。

というわけで、清々しい晴天の日曜がやってきた。清々しい空模様とは反対に、110号の表情は曇りか、嵐なんだろうな、と思っただが、私の予想に反して――清々しいとまではさすがに言えないが――それなりに機嫌の良さそうな顔つきをしていた。

上機嫌が過ぎるあまりか、110号は満面の笑みをたたえて、私にこう話しかけてきたほどだ。

「気持ちよすぎるくらいの晴天だなあ。厳しい、厳しいデートの練習にもってこいの日だ。なあ？」

……なんだか急に、サイン会に行きたくなってきた。

お腹が痛い。

悪寒がする。

吐き気もする。

というわけで、ちょっと今日は家の中でパソコンに向き合って安静にしておこうかな。

……と、110号に言いたいところだが、どんな目に遭うかわからないので、おとなしく、そのままサイン会に向かうことにしておく。

110号は続けた。

「どうせ相手の男も草食なんだし、遊園地や動物園なんかより、作家のサイン会ぐらいがちょうどいいんだろうな」

ふん、と高飛車に鼻を鳴らす。

――どういう意味だよこの野郎。

と、言いたいところだが、どんな目に遭うかわからないので、もちろん口に出したりはしない。自分の身の安全が第一だ。

私は適当にクローゼットの中に入っていたシャツとジーンパンに着替え、適当な布かばんに荷物を詰め込み、適当な薄汚れたスニーカーをげた箱から引っ張り出す。

「……お前、まさかその格好で行くつもりじゃねえだろうなあ？」
戦慄。

振り向いた先には、E-110号の目の鋭い光。

私を背中から一刺し出来るくらいに、鋭利な眼光。

そのつもりだ、と本当は答えなければならぬところだが、私はこう、嘘をつく。

「いや、まさか。今から服を買いに行くに決まってるじゃん」

ははは、と作ったような笑い声をあげ、私はひとまず、110号と服を買いに行くことにした。

たまにはファッションに金を使えという110号の猛プッシュで、普段ならちよつと尻込みしてしまうようなブランド店へと足を踏み入れた。そこはいつもの私が生活しているのとは異空間なのではと思えるほどに、高級感と敷居の高さを醸し出している店だった。置いてある商品も、店にいる店員や客も。

完全に場違いだ。買い物に行くための服すら持っていない私には。と思った時には遅かった。110号がすでに陳列してある商品をチェックしだす。

「お前の太さがちよつとでもごまかせるような服ねえかなあ」
とか勝手なことを言いながら。

こうして見えていても、110号のどこが不調なのか分からないし、110号が廃棄決定したロボットだということも忘れてしまうくらい、自然な行動をとっている。

本人は、こうやって服を選んだり私の相手をしている今も、不安

なのだろうか。それとも、こうしている間だけは忘れてしまっているのだろうか？

すると、幾多の視線が突き刺さっているのを感じた——けど、それは何でもない、若い派手な外見をした女性たちの、110号への好奇の視線だった。

「私が横にいるのって、やっぱり変だよね」

そう思いながらも、110号と服と一緒に見始めた。

14…綺麗なメイク、できますか？

いくら本人が自然にふるまっているからと言って、廃棄のことに触れるのは、今最もやってはいけないことのように思えた。

110号は自尊心が高そうだし、ユーザーに知れていると分かったら、きっと、取り乱すに違いない。

あくまで普通にふるまえ、新成^{あらなり}ここみ！ と自分に言い聞かせる。

110号と店の品物を見た結果、できるだけ私の太い脚や腕が隠れるような柄物のワンピースを選んだ。

母親の時代には細く見えるワンピースのことを「細見えワンピース」とか表現したらしいが、今となっては死語だし、いまだきあんな？ マキシ丈？ ワンピースや？ チノパン？ とかいうパンツはとっくの昔に流行遅れだ。

だいたい、あんな丈のスカートなんて、エスカレーターに巻き込まれて、危険じゃなかったのかと思う。

支払いを終え、新しい服を身につけた状態で店を出た。

今までこんな買い物の仕方をしたことがないため、新鮮だ。

私が店を出るとすぐさま110号はこう言った。

「よし、次は化粧だな、化粧」

……化粧、だと？

「うげ」

私は顔をしかめた。

化粧なんて、私が世の中で苦手としているものベスト3に入る。

後の2つは、人に愛想良くすること、それから110号みたいなチャラチャラした男性とうまくやっていくことだ。多分。

「何が、うげ、なんだよ。お前のすっぴんなんかな、公衆の面前に

さらせるようなもんじゃねえだろうが」

「……ひどい」

「普段からお前は化粧っ気がないからな。買いに行くぞ」

というわけで、私は強制的に化粧品コーナーへ連行された。

化粧品コーナーの何が苦手かって、私とは対極の位置にいなようなキラキラした女たちがたむろっているところだ。もう、それを見るだけで、逃げ出したくなる。こんな場所にこんな私が来てすみません、と。

「お前、今日何も持ち歩いてねえだろ？」

「当たり前じゃん」

「開き直ってんじゃねえよ。普通、持ち歩いているのが」当たり前だろうが」

待ってろ、と110号は私に言い残し、バッチリ化粧を施した女性店員の方へと近づいて行った。

すると、店員の顔がぱっと明るくなった。

こういう場面を見ると、110号見たいなタイプの男もまだまだ人気があるんだなあ、と思ってしまう。

あんな彼が廃棄になってしまふなんて、未だに信じられない。

110号は店員に何やら話しかけ、それから、背後でぼーっと突っ立っているだけの私を指差した。

……なんだか、嫌な予感がする。

店員がファンデーションやらチークやらアイラインなどが詰まった箱を出し、

「どうぞ、こちらにおかけください」

私をカウンセリング用のカウンターのいすに座らせるよう促した。

これってつまり、

「店員さんが私に化粧をするってこと？」

110号はうんうん、とにやつきながらうなづくだけだった。

14..綺麗なメイク、できますか？（後書き）

ここみの時代のファッションを考えるのはあまりにも難しく挫折しました（泣）今の流行がまた復活している可能性もあるのですが…
笑

15：例の、いわゆる、コミュニケーション能力

さんざん化粧を嫌がっていた私だったが、いざ仕上がってみると、不満の言葉どころか、喜びの言葉が勝手に口について飛び出てきていた。

顔が普段の自分よりも何十倍もかわいらしく見える。

目がぱっちりしているし、顔が小さく見える。

こんな自分の顔面は生まれて初めてだ。

自分で化粧をしたって、こんな風にはならない。

「私の顔も、捨てたもんじゃないねー」

思わず呟くと店員は盛大に吹き出し、110号は苦笑した。

「よく言うよな」

「だって、本当にそう思ったからさ」

私は110号に唇をとがらせながらも、踊りだす心を止められずにいる。ああ、これが女性の楽しみなんだと勝手に納得しながら。

110号はやれやれと首を振った。

店員は、まだ、腹を抱えて爆笑していた。

代金を支払うと、私たちは本当の目的である、サイン会へと向かう。店を出ると、

「最後に、お前の決定的な欠点を教えてやろう」

びしっと人差し指を立てて110号はにやっと笑った。

「いや、もうこりごりだから、教えてくれなくても、」

「それは、例のいわゆるコミュニケーション能力の欠如だ」

私の発言をさらっと無視して110号はことさら大きな声で告げた。

私は眉間にしわを寄せる。

「……私、それなりに110号としゃべっているつもりだけど？」

反論すると、110号は、ち・が・う、と一音一音を強調するようにして、私に人差し指を向けた。

それがなかなか様になっているから腹立たしい。

「お前が俺と話しているのは、俺の話した内容に対する文句だとか不平でしかない。自分から楽しい話題を提供できてねえんだよ」

「うぐ……」

これはまた、なかなか、痛いところを突かれた。

もともと、私は話すのが苦手だ。

特に、異性に対しては妙な気を使ってしまったて、うまくコミュニケーションが取れない。

全部、事実だ。

110号は彼自身が勝手にぎゃあぎゃあとうるさく喋るから、特に私が何か話さなければ、と気を使う必要がない。

だから、110号といると、まるで私がちゃんと話すことができるようになってるように錯覚してしまうのだ。

私が言葉を詰まらせていると、仰々しく110号は咳払いした。

何をし出すのだと私が身構えていると、

「さあ、行きましょうか、ここみさん」

ありえないほどさわやかな微笑みを浮かべて、穏やかな口調に切り替えて110号が歩き始めた。多分、声は109号の真似だ。

「ちよっと、」

私は面喰って後を追う。

なんだなんだ、何が起こったのだ、と混乱していると、

「今から俺は、園町になり切る」

きっぱりと110号が言い切った。

……そんなのありかよ。

でももちろん逆らえっこないので、私はおとなしく、後が続く。目的の大型書店は、もう目の前まで見えている。

「……………」
「……………」

何これ110号は黙っちゃう感じですか？
私に喋れっていう暗なるメッセージなのか。
ちらりと110号を見ると、

「……………」

……やはりしゃべりだす気はなさそうだった。
苦肉の策で、私は、

「サイン会、楽しみですねえ」
と口にしてみた。どうして敬語になったのか、さっぱり分からない
けれど。

「僕はどうでもないですけどね」
110号はこう切り返してきた。

……こんな返事をする男がいるか？
どう返すべきか分からず、

「そうです…か」

………会話終了。

16..まさか、こんなところで会うなんてね。

それから再び私たちの間には沈黙が流れ始めた。

いや、流れ始めかけた。

110号が流れようとする沈黙をぶち破った。

「『そうですか』じゃねえよ！ お前は会話を続ける気がねえのかよ！」

いやいやいや。理不尽じゃないですか。

「だって、あんな返事じゃあどうやって返せばいいのかわかんないじゃない」

「世の中にはそっけない返事をする男だって山ほどいるんだよ」

「そうかもしれないけどさあ……」

確かに、それは言えているのだが、まさか2人のデートの時にそんなそっけない返答をする男はまさかないだろう、と私は内心、こっそり反論する。

「はい、やり直し。じゃあ今度は特別に、俺から話題を出してやるから」

パンパン、と手を打って、110号は仕切り直しの合図をする。

これじゃまるで映画監督だ。

「ところで、今日のサイン会に来る作家さんってどんな人なんですか？」

110号は再び偽物のさわやかさを顔に浮かべ、声に浮かべ、練習を始めた。

「ああ、言い忘れてましたね。児童文学作家さんです。知りませんか？ 開拓者に先住民が追われているところに、神様が箱舟を出す、あの話」

その話を読んだのは小学生になる前だったか、低学年だったか、はっきりとは思っていないが、その物語を読んで以来、この年にな

るまで、私はその作家のファンだった。

「タイム」

「え？」

110号がさつと右手を挙げた。平坦な声で発音される「タイム」は、どこことなく、恐怖を感じる。

「お前さあ、今何歳だよ？」

案の定、110号は顔を苛立ちで歪めながら、私を見下ろしていた。

そんな険悪な表情では、イケメンも台無しだ。

「27だけど」

「27だけど、じゃねえだろ。27にもなって児童文学？　うそだろ」

27、という数字を強調して、110号は声を張り上げた。

「やっぱり、アウトかな」

私がおずおずと尋ねると、間髪おかずに、110号の

「アウトだろ」

という返事と、

「いや、アウトじゃないですよ」

という、誰かの声が突如として割り込んできた。

110号の作りもののさわやかボイスとは比べ物にならないほど、いや、比べては失礼なほどにさわやかで透明感のある男性の声だった。

え、誰？　と私と110号は怪訝な顔をして声のした方を振り向く。

そこにいたのは、

「まさか、こんなところで会うなんてね」

細身・色白・メガネ・温和。

検索結果 1件。
園町聡武。

……園町さん？

あまりにも不意を突かれた出現に、私の頭はすっかり混乱して、まともな思考ができなくなっていた。

私の頭はすっかり混乱していた。

うそ。なんで、ここに？ 何、この急な展開は。

っていうか、「検索結果」って、私の頭は何を考えているんだ。フリーズしていると、彼はクスリと笑って、

「びっくりしたよね。覚えてる？ 園町聡武だよ」

「はははははい、もち、もちろん、覚えてますっ」

……噛み過ぎだ、私。

17 プレ・デートを楽しもうか

あまりの格好悪さに今すぐにでも爆発して塵になりたい気分になった。恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

「この年でも、全然アウトじゃないですよ。現に、僕もファンです」

園町さんは微笑みながら、かばんの中を探り、一枚の色紙を出して見せた。

「あ……」

私は色紙を見て思わず顔をほころばせた。

私のお目当てだった作家のサインが、色紙の上を踊っていた。

「僕もサイン会に行ってきたんですよ」

偶然とはいえ、嬉しいものだ。自分と同じ趣味を持った人と出会えるなんて。

私の胸は小躍りした。

そこでふと、私は、園町さんの横に女性が立っていることに、今さらながら気付いた。

地味だが顔立ちの整った、和風テイストな女性。

……っていうか、デート中ですか？

嫌な汗がわき出る。

彼女なの？

何、もしかして私、もてあそばれてました？

さわやかイケメンとデートできると思ってたそわそわうきうきしながら過ごしたこの数日間は、一体……。

「あれ、お前さ、俺と同業者だよなあ？」

私がマイナス思考のエンドレスループに陥りかけたその時、11
0号が女性に向かってなれなれしい口調で尋ねた。

は？

同業者って何。

この女の人ロボットだって言いたいのか、このホスト男。
とか何とか思っていると、女性がこくりと頷いた。

それから、黙って彼女は首に巻いていたストールを外す。

あらわになった細い首には、「W—B—203」と彫られていた。

……うそ。どうということなの？

「おい、この優男もロボットレンタル中だぜ？」

まじですか。

私が真偽を確かめるようにして園町さんの方を見ると、彼は恥ず
かしそうに頬を赤らめながら

「実は、そうなんだよ」

とあっさり認めた。

なんですか、この展開は。

「その前に、一つだけいいかな、新成さん」

「はいっ」

授業中に急に名指された小学生のような返事を私はする。

「サイン会は30分ほど前に終わったんだ」

「……へ？」

私は間拔けた声を出す。そんな、と思い腕時計を見る。もうとっ
くの昔に午後になっていたようだ。

「しまったああ」

こんなへまがあるのかと、私は嘆く。

「このグズ」

すかさず、110号が吐き捨てた。

慰めるという単語は、この男の辞書にはない。絶対に。

「まるで、これはプレ・デートだね」

4人で——いや、2人と2台で喫茶店に入るや、園町さんはそう言った。楽しいな笑みを浮かべている。

「プレ」とはいえど、これはれっきとしたデート——その事実には、私はドキマギして、うつむく。

本当の本当に、緊張していた。2人きりではないというのに。

「本当に男慣れしてねえなあ」

と110号は足を組み、肘をつきながら言い捨てた。

うるさいな、と反論する余裕もない。

そこで、ずっと黙りこんでいたW—B—203号が、閉ざされていた口を開いた。

「あの、私のこと、覚えていないんですね？」

「え？」

私は首をかしげる。

前に、会ったことがある？

「前に、美術館への道をお聞きしたんですが……」

そう言えば。

私はじっと、203号の顔を見つめる。

仕事中に県立美術館への道を尋ねてきた、あの地味だけれども顔立ちの整った女性。

すると記憶のひもが解かれていくのが分かった。

あの時の女性に違いない。

「思い出しました」

私がぽんと手をたたくと、203号は嬉しそうにした。

「ここみさんがどんな人か気になって、見に行っただですよ」

「こいつをわざわざ見に行く価値、あるか？」

110号がすかさず突っ込む。心底つまらなさそうな顔をしているのは、単純にその場に居合わせなかったことをさみしく思っているようでもあった。

……結構、110号もお子ちゃまなところあるんだな。

私が彼の横顔を眺めながらくすりと笑うと、110号は間髪いれず私にデコピンを食らわせた。

それが意外に痛くなかったのは、ここだけの話だ。

18..2人にしないで!

「よし」

ご機嫌斜めな110号が、何やらよろしからぬ思惑を巡らせているような表情を浮かべた。

ちらりと私を横目で見て、にやりと口の端を上げる。

……悪い予感がする。何かを企んでいる様子丸出しだ。きっと、それはろくでもないことに違いない。

「俺たちロボットは邪魔者だな。なあ？」

110号はおとなしくコーヒーを飲み続ける203号に言う。

突然110号に話しかけられたことに彼女はびっくりと肩を跳ねさせるが、すぐに110号の意図に気付いたかのような表情をする。

園町さんの顔と私の顔を交互に見比べたのちに、

「そ、そうですよね!」

と顔をひきつらせながら、首を縦に振った。

……何なの、この流れ。

「じゃあ、俺たちはちょっと外に」

もしかして、110号も203号もどこかへ行ってしまう、イコール、私と園町さんの二人つきりになるということ?

その狙いに気付いた途端、私は席を立つ110号の服の裾を掴んでいた。

「ち、ちょっと、待ってよ!」

「何だよ、俺たちロボットは忙しいんだよ。な?」

203号もこくりと頷く。

「ええ。とっても忙しいんです」

110号に言われるがままだった。

園町さんがどんな表情をしているか、確かめる度胸もなく私は1

10号ばかりを見つめる。

「ままま、待って！ ふ、ふふ、2人にする気？」

私は慌てふためく。気付けば、じっとりと手汗まで握っているではないか。

「えー？ 聞こえねーな」

彼は露骨に聞こえないふりをする。

「ふ・た・り・に・し・な・い・で・く・だ・さ・い！」

「今さら丁寧に言ったって、遅いつての」

私の懇願に、冷たく鼻を鳴らしたかと思うと、そのまま203号を引き連れて、

「じゃあ、ごゆっくりー」

手をふると、私から逃げるようにして喫茶店を出ていった。

「やられちゃったねえ」

愉快そうに笑って、園町さんは言う。私と比べ、さほど緊張はしていないように見えた。

対して、私はというと、ガチガチのガチガチに緊張していた。肩に力が入っている。表情も堅い。

（これじゃ本当のデートじゃない！）

そう思えば思うほど、まともに思考できなくなる。

「すみません」

何が申し訳ないということもないのに、謝罪の言葉が口をついた。

「君が謝ることじゃないよ。大丈夫」

園町さんは私の意味不明の謝罪に、笑顔で返す。大人の余裕だなあとうらやましくそれを聞く。

2人きりになってしまつて、会話が果たしてもつだろうか。

私の頭の中は、そんな不安でいっぱいだった。

何を話そう、何を話そう、と必死に頭を回転させているつもりなのだが、緊張のせいかな、ちっとも言葉が出てこない。

私が視線をあちらこちらに飛ばしていると、園町さんが思い出し

たように口を開いた。

「お互いロボットをレンタルしていたなんて、奇遇だね」

ナイス切り出し！　と思わず私は心の中で園町さんに親指を立てる。とりあえずは助かったようだった。

「そ、そうですね！」

だが借りた理由が借りた理由だけあって、私は少し顔を赤らめる。園町さんとのデート練習用だとか、クリックミスであんな口煩いロボットを借りてしまったことだとか、話せるわけがないではないか。

でもここで黙ってしまつては、せつかく話を切り出してくれた園町さんに申し訳ないのではないだろうか？

……勇気を出せ、新成ここみ！

自分自身を奮い立たせ、口を開こうとしたその瞬間、園町さんはこんな言葉を口にした。

「実は、僕がW－B－203号を借りたのは、君が理由なんだ」

19..胸がやけどしそうです。

「私が、理由？」

一体この人は何を言っているのだ、と私は首をひねる。

園町さんが何が言いたいのかがつかめない。不器用なことに。人の気持ちをうまくつかむのは、本当に難しいことだ。

きよとんとする私を見てか、園町さんはくすりと笑った。

「そう。僕はね……」

そこまで言いかけて、はたと口を閉ざす。

「いや、やめておこう。この続きは、”本番の”デートで話すことにするよ」

少しだけ恥ずかしそうにして、園町さんは続きを伏せた。

「そんな、先が気になるじゃないですか」

私は唇を尖らせる。どんな訳があるのか、今すぐにでも知りたい。こんな、私みたいな人間をデートに誘って下さるその訳を。

「そんなに気になる？」

いたずらっぽく園町さんは白い歯を見せる。

「はい、気になります！」

私がこくりと頷くと、

「じゃあ、今度にしよう」

園町さんは焦らした。

「ええ！ ひどい！」

私が冗談交じりに抗議すると、園町さんは声を立てて笑った。

その笑顔を見て、私はふと我に返る。

……なんだかい感じのトーク、できているかも、と。

それからは、園町さんの仕事場での笑い話とか、好きな作家のネタだとか、そんな些細な話題を、沈黙の時間を一切作らずにお互

い話していった。

そのほとんどは園町さんの方から振られた話題だったが、ちゃんと私からも話題を振ることには振った。

「園町さんのロボット、和風美人でいいですね」

園町さんは照れながら、私の言葉を肯定した。あまり派手な女性が好きではないとも付け加えてから、

「君のロボットはなかなかカッコいいね。あんな男性が好み？」と尋ねた。

まさか、と私は首をぶんぶん振って否定する。

「ち、違うんです。ちょっと訳があって……」

顔を赤らめながらぼそぼそと言葉を紡ぎだすと、彼はよ興味深そうに身を乗り出した。

「へえ、どうしたの？」

これを説明すると、本当にドジだと思われるだろうなあと懸念を抱きながら、私は答える。

「クリックミスなんです。私、どんくさいですよ。1号間違えたんです。本当はその横にあったロボットを借りたかったのに」

私が少々勇気を振り絞って説明すると、また園町さんは声を立てて笑った。

「君って、結構ドジっ子なんだね？」

園町さんはさわやかにそう言ってみせた。そのとたん、私の心臓はばくばくと音を立て出す。

なんだかものすごく、顔が熱い。

だいたい、私に「ドジっ子」なんていうかわいい言葉は似合わない。そんな年齢でもないし。

それを園町さんに伝えると、にこりと天使のような微笑みで彼はこう答えた。

「かわいくないなんて、そんなこと言わないで？」

……ぎゃああああ、顔が、やけどする！！

私の心臓がかつてここまで激しく血を押し出したことがあったろうか。

どんどんと速まりつつある拍動に、私はもう何も言うことができなくなっていた。

とにかく今わかることは一つ。

園町さんに、マジ惚れしそうだ。

そんな単純なこと以外、もう何も思考が回らないのだった。

20..裏道

私たちの会話も随分と盛り上がり、普段はだんまりな私も饒舌になってきた、そんな折だった。

「あれ、どうしたんだい？」

園町さんがふと、私の背後に向かって声を投げかけた。つられて私も園町さんの視線を追う。

そこには、さきほどまでどこかへ移動していたはずの203号が、遠慮がちに私たちの座っているテーブルへと戻ってきた。

「盛り上がっているところをすみません。バッテリーがそろそろ…」

203号は心の底から申し訳なさそうに首を項垂れた。

せっかく楽しくなってきたところなのに、と私は唇を噛む。

そんな私の様子に気づいているのかいないのか、203号は私に深々と頭を下げた。

「本当に申し訳ないですっ」

誤ってすむと思っただけなのかこのやろう、と私が心の中で密やかに呟くと、園町さんが口を開いた。

「ごめんね、僕がちゃんと充電にまで気を配っていればよかったんだけど」

申し訳なさそうに園町さんまでもが頭を下げるものだから、私が憤りの心持ちを放棄せざるを得なかったのは、事実だ。

私は園町さんの謝罪を目の前に、あっさりと戦う姿勢を放棄した。

「いえいえ、そんな、気にしないでください。ほら、これはプレートですし」

思いつきりの笑顔で、私は応えた。私も随分と成長したものだ。

それから園町さんは私の分まできっちり支払いを済まし、203号を連れて店の表へと出た。

「それじゃあ、本番のデート、楽しみにしているね」

「はい。本番では、ぜひ園町さんの『秘密』、教えてくださいね」
「はは、やっぱり覚えていたんですね……わかりました。楽しみに
しててください」

そんな風に会話を交わし、園町さんは去っていく。
私も帰ろうかな、と思い、そこでようやく気付いた。

110号は、どこへ行ったの？

喫茶店の周りを見渡すも、それらしき金髪ホスト青年は見当たらない。

それから10分ほど私は店の表の道を見て回り、道に面した店にも入ってみたが、110号の姿は見えない。それどころか、金髪の青年一人しかいに入っていない。当然だ。今どきあんな色の髪は流行らないのだから。

まさか、仕事放棄だろうか、と私は首を捻った。それは困る。まだ110号が私の元に来てから3日しか経っていないのに。

「110号、レンタル代返せー」

そんな冗談を小さく口にしながら、私は隣の通りまで足を運ぶ。どちらかといえば、車の量も人通りも少ない、幅の狭い道だ。古臭いスナックだとか、小さな美容室がぼつと建っている。そんな道に110号が好き好んで進むとは思えないが、私は歩を進める。全く手のかかるロボットである。

しかし、その道に足を踏み入れたことは不正解ではなかった。
諍いの声を、私の耳が捕らえた。

「お前、あと11日でゴミになるんだってな」

なじるような口調でそんな言葉を発しているのが聞こえる。品のない声だ。もっとも私が苦手としている人種のそれと一致する。

——これって、もしかして。

私の心臓が不穏な音を立てて暴れはじめる。

私と110号が過ごすことが出来る残りの日数は、11日。ちょ

うど、一致している。

私は声のする方へとそっと近づく。

そこにいたのは、案の定、金色に髪を輝かせる110号と、大柄で目つきの悪い男、そして男の横で彼と腕をからませる化粧の濃い女だった。1台対2人で向かい合っていて、まるで今から決闘するかのような不穏な雰囲気を漂わせていた。

——何かが起こりそう。

私はスナックの看板の裏に身を潜ませ、その様子をしばらく観察することにした。

21…ロボット対ロボット

110号があと11日で廃棄になるという事実を知っているということは――。

私は考える。

もしかすると、あの男か女のうち、どちらかは、これまでに110号と接触があった、もったいえば知り合いだということだ。そして、もう一歩進めてしまえば、2人のうちどちらかはロボットだという可能性もある。

私は看板の陰から身を乗り出すようにして、2人の首元に目を凝らす。

化粧が濃く、有名なブランドのバッグを肩から提げた女の首の方は、シルバーのチョーカーを光らせているだけだった。ただし、そのチョーカーもずいぶんと高そうだ。ブロンドの髪はこれでもかというほどきつくパーマが当てられている。私とは正反対というわけだ。

そして、彼女が腕をからませている男の方かというと、髪は一部分だけを極端に刈り上げた、私には理解不能な奇抜な髪形で、首からも手首からもじゃらじゃらとアクセサリをぶら提げていた。

顔には不自然な傷がある。それは彼を柄悪く見せている一因だと言えたが、それ以上に細く鋭い目元の方が、破壊力があつた。絶対に、近寄りたくない。

ズボンの尻ポケットには無造作に財布が突っ込んであるのが見えた。不用心ではないか、と思ってから、こんな柄の悪い男には、スリも近寄ってこないのかもしれない、と思い直す。財布を掏ったことがあれば、どんなしっぺ返しを食らうことか。私がスリなら、絶対にこんな男は狙わない。大人しくサラリーマンの懷でも狙うだろう。

彼の首に注意深く視線を送ると――

(やっぱり)

私はこくりと頷く。あったのだ。「C-069」というナンバーが。私の推測は間違っていなかったようだ。

これで、あの男が、110号と同じく恋愛シミュレーションロボットだということは確定だ。そしてきつと、化粧の濃い女の方はそのロボットをレンタルあるいは購入しているということだろう。恐らくは購入だろうけれど。

それにしても、なんて嫌な奴らなんだ、と私は眉をひそめる。

C-069号というロボットは、廃棄が決まったロボットに対して、なんという心ない言葉を吐くのだ。彼の人格を疑う。いや、正確には「人」ではないが。

110号は私にとって「苦手」に分類されるタイプの男だが、C-069号ほどではない。110号はチャラチャラこしているものの、本当の本当に相手の心を傷つけるようなタイプではない。私のことを「ブス」「ブス」とは連呼するが、なんだかんだと言っても面倒見はいい。はずだ。

……ちよつと褒めすぎかな？

まあ、とにかく確かなのは、私はあのC-069号の振る舞いが気に食わないということだ。

そうこう考えている間に、いつの間にか110号はC-069号の首根っこを引っ掴んでいた。その表情の険しさに、私は一瞬、鳥肌を立てる。目を吊り上げ、口元は憎しみを具現したとでもいうべき歪みを見せていた。心の底から怒りを覚えているというのが、傍目にも明らかで、私は今いる場所から一步も動けない。

「この野郎、好き勝手言いやがって……！」

私が心でつぶやいた言葉と全く同じ台詞を110号が言ったものだから、私ははっとする。

しかし、それにもC-069号は一切怯える様子を見せない。

「おいおい、俺に八つ当たりか？」

それどころか、余裕とでも呼ぶべき薄笑いを浮かべているではな

いか。浅黒い肌の上で、白い歯が光る。

22：いつもと違うのか、同じなのか。

「暴れてもいいんだぜ？　その代わり、お前の大事な大事なバッテリーが傷ついたって俺は知らねえからな」

挑発の言葉に、私は握りこぶしを作る。

110号が答えるより先に、女の方が口を開いた。

「私にレンタルされていたところは、もっと男性的な魅力に溢れていたのねえ。今じゃ、草臥れて見えるわ。よっぽどブスで経験もないようなつまらない女にレンタルされているのね」

そう言う女は含み笑いして見せた。

……どうせ私はブスで経験も限りなく零に近い女ですよ。

悪口は散々言われ慣れているため、あまり怒りというほどの感情は湧きあがってこなかった。

それにしあって、あんな百戦錬磨のような雰囲気を漂わせた女の人、恋愛シミュレーションロボットを借りるものなのだろうか？ 私首をひねる。どうせブスの私には事情など理解出来っこないだろうけれど。人間にはない面白さ、のようなものがあるのかもしれない。

挑発に乗るほど、110号だって馬鹿じゃないだろう。

——私のそんな考えは、1秒後には粉々に打ち砕かれた。バシンという威勢の良い打撃音によって。

110号は遠慮なしに069号の頬を殴っていた。

しかし069号は、その立派な体格のためか、ちっとも応えていないようだった。

ふんと鼻を鳴らし、110号を見下ろす069号は、大きな壁のように私の目には映った。

気付いた時には、110号は腹を押さえ、尻もちを着いていた。苦痛に顔を歪めて。

069号が腹を一蹴りしたのだ。あの太い足で、彼よりはるかに細い、110号を。

私はスナックの看板から飛び出した。

特に、何の考えもないのに。

「やめなさいよ！」

私の声が、小路に響き渡る。普段ならこう言う肝心な場面に限って噛んでしまったりするのだが、どういうわけか、今日は凛々しく言うことが出来た。

もしかしたら——私は考える。

普段と格好が違うからいつものようなびくびくした態度とは真逆に、勇ましく、強気で振舞えるのかもしれない。化粧もバッチリで服装もキマッているから、自然と心も外見になじんできたのかもしれない、と。

そう有頂天でいられたのも、束の間だった。

女とC—069号がお互いの目を見合わせて、冷笑とも苦笑とも取れるような表情を浮かべながら、

「何このキモイ女」

と吐き捨てた。

キモイ、という言葉に、私の氣勢は一挙にしぼんだ。ぐさつという、矢が刺さる音が私の心臓の辺りから聞こえそうだ。

それから彼女は069号に絡めた腕を引っ張るようにして、上目遣いで

「行こうよ、なんだかあいつ、面倒くさそうだよ」

と進言した。唇をとがらせながら眉根を寄せて男性に物を言う様には、不自然さが読み取れない。よほど慣れているのだな、この悪女め、と私は罵りの声を心の中で上げた。私には当然、そんな行動を取る勇氣も資格もない。

069号も露骨なため息を着くと、彼女の言葉に同意し、私たちに背中を向け、早足に歩き出した。

「ちよつと……」

私が声を掛けるも、当然2人は無視だ。

これでいいのか悪いのか、複雑な心境ではあるが、忌々しい物が離れていった安心感だけは私の中に残っていた。

23…涙を流せるものなら

110号の方を振り返る。彼は、さきほど069号に突き飛ばされた時の余韻か、地面に尻もちをついたまま、神妙な面持ちで2人の背中を見つめていた。いや、本当に2人の背中を見つめているのかは分からない。よく見れば、目の焦点が合っていなかった。

「ほら、立ったら？」

立とうとしない110号を不思議に思い、私は110号に手を差し伸べた。

するとようやく自分がぼんやりしたことに気付いたか、110号ははっと視線を上げ、

「ああ」

と返事をするも、私の助けは借りずに立ちあがる。それでもその様子は、いつもの110号とはまるで違う。別人のように大人しくなっている。

もしかして、069号に押された時にどこかの部品に傷でもついてしまったのだろうか。だとしたら、大問題ではないか。

「……どこか痛めた？」

私はおそおそと問いかける。その質問に110号は首を横に振った。やけに瞼をパチパチさせているかと思ったら、彼の口から飛び出したのは、こんな文句だった。

「泣けたら、楽なんだ」

突如として零れた言葉を、私は拾い損ねる。

「え？」

問い返すと、110号は腰を上げながら、こう口にした。相変わらず、神妙そうな顔つきで。

「ロボットは、涙を流せない。だから、悲しいときには、その感情の逃げ場がない。設計者のミスだよな。人間の方がよほど楽なんだ」

それから、彼は自虐的な笑みを浮かべた。しかしそれでも、目だけは笑ってはいない。私の表情も強張ったまま固まる。

110号の言わんとしていることが、わずかではあるけれど、分かるような気がした。

以前にテレビか何かで、人は悲しいとき、涙を流すことで身体を守っているのだと聞いたことがある。ストレスや悲しみ、爆発的な感情を涙を流すことによって発散させているのだと。

ただ、ロボットである110号にはその機能がない。それは恐らく彼にとって悲劇であるに違いない。感情の行き先がないという、悲劇だ。

最後に110号が呟いたのは、こんな言葉だった。
「なんか最近、こう思うんだ。人間になれたらって」

それから2日間、110号はこの出来事について、一切口を割らなかった。それどころか、めっきり口数が減り、私の話しかけた言葉に対しても、上の空、という風だった。

110号は、明らかに心の傷を負っているように、少なくとも私の目には映った。その心の傷は、ロボットにも人間にも成り切れない、110号の悲しみのもようであった。

ロボットならロボットで、いつそのこと無駄な感情など捨ててしまいたい。

人間になれるのなら、涙を流したい。

その2枚の板の間で、110号は悩み、葛藤しているのではないかな——私は推測した。110号には決して言えないけれども。

きっと私がこんなことを考えていると知れば、余計に110号は傷つくだろう。

そっとして、110号自ら口を開くまで待つよりほかない。強制的に聞き出すべきではない——ガサツに見える私にも、それくらいの分別はある。

出来るだけ気まずい空気を作るまいと心がけるでもなく、平静を装って数日を過ごした。

110号がようやく私に事情を打ち明けてくれたのは、あの日からたっぷり3日経った後のことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5876q/>

イケメン男子、レンタルできます。

2011年12月1日18時50分発行